2014年2月22日

〈近松のことば〉と〈俳句のことば〉

俳人　木割　大雄

私も俳人の端くれ。〈ことば〉については毎日、悩んでいる。分からないこと、ナンギなことが多すぎるのだ。

そもそも、ことばとは不変のモノか。

〝近松の時代〟には「お父さん・お母さん」という言葉はなかった筈。「父様・母様」と書いて「トトサマ・カカサマ」でしょ。

そんな時代の言葉なのに、近松の床本は今でも音読すれば意味が分かる。何故なら「浪華のことば」。大阪弁だから。話しことば。これは殆ど変っていない。

加えて、その口調が、七・五調。耳ざわりがいいのだ。だから理解できる。

ではでは、俳句はどうだろう。

さまざまのこと思ひ出すさくらかな

という有名な俳句がある。作者は松尾芭蕉さん。近松とほぼ同時代の人。ともに、元禄文化の中心に居た人。

さてこの一句。現代のことばと変らない。難しいところはひとつもない。桜が嫌いな日本人は居ないだろう。桜を見れば誰れでもいろんなことを思い出す。だから、この一句、分かり易い。

でも、果してそうだろうか。この句を読めば誰れでも同じ気分になれるのだろう。だが、ことばの不思議さは、ここから始まる。

桜、と聞けば誰れでも思い出せる桜があるけれど、それが同じということは有り得ないのだ。一人々々が全く異る風景を思い浮かべている筈だ。いつ、何処で、誰れと見た桜であるか。桜の種類も当然、各々に異なる。

言い変えれば、作者と読者が、同じ風景を頭に描くことは有り得ない。言語は正確に伝わっているわけではない。

にも関わらず、この一句には誰れでも共感できるし、共鳴することができる。正確なことは何ひとつ伝達していないのに、感動する。

それもまた、ことばの不思議さなのだ。ことばとは、感動を伝えるモノではなく、感動させるモノなのだ。

芭蕉の一句が、名句と称えられる理由が分かって頂けただろうか。

俳聖・芭蕉の、この名句がある為に、俳人の端くれである私は、桜の俳句が作れない。勝てるわけがないから。それでも桜の季節になると、一句、ヒネりたくなる。言葉を選んで悪戦苦斗する。

花終えてさくらに過去はなかりけり

花が散ってしまった桜には過去がないという一句。花のあとは葉桜となり、新緑のシーズンとなる。過去はない。過去があるのは人間——という一句なんです、この句。

作者は沖縄の人。私と同世代。即ち、幼児期に戦争の記憶をもつ。成人して、戦後の沖縄を見て、今も、新しい過去を積み重ねている人。

こども達の笑顔に囲まれて

作者がどういう人か、を知ることによって俳句の意味が、ことばの意味が変わってくる。ことばはナンギなんです。

さくらの木秋になったらふつうの木

この句の作者は小学三年生。私が教えに行っている伊丹の小学校の校庭であっさり作ってくれた一句。これまた、ことばの世界。

言葉とは、意味をもつ単語の連続なのに、受け留め方は、人それぞれに異なる。それは、俳句でも芝居でも同じだろう。研究所長の井上先生がいつも言われる——登場人物の気持がそうであっただろう、そうに違いない、と観客に思わせる言葉——思わせぶり。

当然そこには誤解も生まれる。

私はそれでいいと思う。愛情のない理解よりも愛情のある誤解の方がいい。

私は今、招かれて小学校へ俳句を教えにいく機会が増えつづけている。そこで私は、ことば足らずの彼等彼女等の、ことばの奥にある本音を、愛情をもって受けとめようと心がけているのです。

さきほどの、こどもの俳句をもう一度読みなおして下さい。